

# 生活科の学びと力量形成のあり方 ～授業改善シートを活用して～

## Life Environment Studies and Teacher Development ～Improving Classroom Instructions～

藤 池 安 代

### 要 旨

「教科教育法・生活」の中で、教師としての力量を高めるための手立てを考察する。具体的には、開発した「授業構築・改善シート」を活用しながら、学生の授業分析を行い、その変容や教員としての力量形成のあり方について考察を加えた。

キーワード：生活科教育、教師教育、授業力向上、授業構築・改善シート

### 1. 研究の目的

平成25年度より全ての大学で「教職実践演習」が実施されるようになり、教科の指導のあり方についても、

- (1) 模擬授業の実施を通じて、教員としての表現力や授業力、子どもの反応を活かした授業づくり、皆で協力して取り組む姿勢を育む指導法等を身に付けているか確認する。
- (2) 教科書にある題材や単元等に応じた教材研究の実施や、教材・教具、学習形態、指導と評価等を工夫した学習指導案の作成を通じて、学習指導の基本的事項（教科等の知識や技能など）を身に付けているか確認する<sup>1)</sup>。

と、具体的な方策が示された。

このことから、大学では、より実践的な能力を培っておくことが求められており、日々の授業を見直し教職実践演習のねらい等を効果的に機能させていかなければならないと考える。特に、前述した教科指導の在り方については、現職教員にとっても常に確認すべき技能（力量）である。これらのねらいを達成するためには、講義の中で確実に力量形成がなされるべきである。また、これまでの私自身の生活科の取り組みの中で児童や教師変容を追究する実践研究を行ってきた<sup>2)</sup>。その手法を具体化していくことで、教員や学生たちの授業力向上を図ることが

できると考える。

実践の場にある現職校長、新任教諭の意識調査（本論文p187を参照）からも教科指導の能力を高めることの必要性がうかがえる。

以上より、「教科教育法・生活」の中で学生の教員としての資質向上と授業の力量形成を図るための有効な方法を明らかにすることは急を要する課題である。

## 2. これまでの授業研究等で見出された授業設計・授業改善の方策

授業づくりで大切なことはクラス一人ひとりの子どもたちの様子をしっかりと把握することである。児童の実態把握は授業を組み立てていく上で大変重要な意味合いをもつ。この発問でどれ位子どもが理解できるか、この教材提示で誰が強く反応し興味を示してくるのかを常に想定し考えながら、一つだけではなく2～3パターンの指導案を用意する。そして、子どもたちの反応を見ながら、瞬時に判断しどの方向からでも目標に迫っていけるように準備しておくことが大切である。そうする事でより子どもの思いに沿った授業を展開することができる。この取り組みを通して、子ども自身が、一つの豊かな体験活動から多くの学びを獲得し、その知識や情報に感動し、きちんと振り返り、それを自分の成長として受け止められるようになる。その体験や経験の積み重ねは、子どもたちの着実な学びとなっていく。また、ゲスト講師や授業サポートとして保護者や地域の人々に参加してもらうようにする。そのことにより、保護者や地域の人々は、子どもたちの学びに間近で接することができる。そして、学校教育により深い関心と理解を深め、連携協力体制をも確立していくことにつながるものと考えている。

## 3. 大学等専門機関との連携

### (1) 研究実践の進め方

学校内だけで教育実践をしていくと、どこまで深められたか、何が問題であり課題なのかを客観的に把握することは困難である。年間カリキュラムを作成し、授業を構築し、教材を作りPDCAサイクルを常に機能させたとしても限られた範囲のことしかできない。そこで重要なのが専門機関や大学との連携である。大学の研究者と共同・連携を図ることで、客観的な評価や理論的な位置づけ、また、専門的な授業分析や児童、教師の力量形成の過程や成果・課題についての助言やデータが得られる。

これまでに水越敏行氏（大阪大学名誉教授）と若き研究者の方々と共同で研究実践を重ねてきた。その手順は以下の通りである。

- ①生活科、総合学習、合科学習としての年間カリキュラムを作成
- ②子どもたちに付けたい学力の明確化
- ③授業計画立案
- ④指導案作成と教材の考察（子どもの反応に合わせた指導案を2～3パターン準備）

- ⑤①から④について課題、問題点を確認し、修正。また、児童、教師の観察視点の確認
- ⑥授業実施（教師・児童、全てを撮影）
- ⑦授業後⑥のビデオをもとに検証
- ⑧大学研究者は教師、児童、授業について分析
- ⑨分析結果をもとに再度話し合い
- ⑩授業後、教師はビデオ視聴、授業展開、児童の変容の確認
- ⑪全データから児童・教師の力量形成の変容、教材的価値・位置づけ、授業構築度等のまとめ  
これらの取り組みの結果、PDCAサイクルが十分機能し、1年間毎の実践分析結果から児童・教師共に力量形成がなされたことを実証することができた<sup>3)</sup>。

また、これまでの研究実践から授業構築・授業改善に必要な観点を明確にし、観点ごとに内容を細分化し、授業改善シート（チェックリスト）を開発した。次項（2）にそれを示す。

## （2）開発した授業改善シート

授業構築・授業改善のためにさらに整理し、次の10の観点（視点）を設定した。

この観点は、授業設計を行う上で、子どもが興味・関心を持ち、課題設定し問題解決していく過程を包含したものである。この授業改善シートは、授業者にとっては、授業設計や授業後の振り返りに活用できるし、授業参観者にとっては、授業観察する視点として位置づけることができると思う。この授業改善シートを日々の生活科や他教科の授業の中で活用・分析していくことにより、改善を要する課題が明確になり、ひいては授業力向上につながっていった。

### A. 授業構築・授業改善のための観点

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| ① 学習の動機付け・目標の明示 | ② 発問・指示・説明      |
| ③ 資料提示          | ④ 場の工夫          |
| ⑤ 板書の構成         | ⑥ 児童の思考・活動時間の確保 |
| ⑦ 学びあう場の確保      | ⑧ 個への対応・支援      |
| ⑨ 形成的評価と柔軟な授業構成 | ⑩ 学習環境          |

上記10項目の観点をさらに細分化して、次に示す「B. 授業構築・改善のためのチェックリスト」を作成した<sup>4)</sup>。このチェック項目は、授業者が無理なくチェックできる項目とする。なぜなら、授業設計や授業展開を苦手とする教師のつまづきを押さえることができ、授業力向上に役立つと考えるからである。

### B. 授業構築・改善のための教師のチェックリスト

- ①学習の動機付け・目標の明示  
・授業の第一声で児童の興味・関心がもてる発問や教材を提示する。

- ・本時のねらいに沿った課題を1～2個出し、興味の持続を図る。
- ・次時の学習の予告を児童の関心興味もてる内容で伝える。
- ・子どもたちが一時間の見通しがもてる授業展開。

## ②発問・指示・説明

- ・本時のねらいを確認しながら、発問をする。
- ・ぶれない課題と中心発問（言葉を含む）の十分な吟味。
- ・子どもの反応をみながら発問の程度を工夫する。
- ・常に共通語（標準語）を話す。
- ・言葉は、ゆっくりはっきりと話す。
- ・アクション&リアクション（表情、声、動作、姿勢など）ができる。
- ・指示・発問は短く具体的に与える。
- ・指示・発問は一度にひとつ。
- ・質問は一通り説明するまで受けない。
- ・指導者の意図に反する応答にも丁寧に対応する。
- ・自分の発することは、児童の発することばに敏感である。
- ・児童の発言を繰り返して言っていないかチェックする。
- ・つぶやきに反応しすぎていないか。
- ・話し方（テンポ、スピード、イントネーション）が聞きとりやすいか。
- ・声の大きさに気をつける。
- ・「わかりましたか」と常に言っていないか。この言葉は禁句。
- ・アイコンタクトを大切にする。
- ・教師として豊かな表情（笑顔、怒り、笑い等）、動き（ジェスチャー、芝居）ができているか。

## ③資料提示

- ・自作教材を一つは作っておく。
- ・具体的な補助教材を用意しておく。（内容や新しい学びの理解を助ける具体的で子どもの興味関心を高めるものを作成）

## ④場の工夫

- ・一問一答式にならないように、活動を入れる。（話し合い活動、考えをノートにまとめる、動作化をする）
- ・児童の集中力は5分程度と考え、内容を展開していく。

- ・どの授業でも既存の学習を取り入れたり、合科的な展開を工夫したりして、児童が理解を深められるよう配慮する。
- ・子ども同士のかかわりが生まれる場面を意識して作る。(相談、作業、体験)
- ・子どもを育てる、鍛える。(授業を支える学習スキルの継続的指導と定着)
- ・極力、直接体験の場を大切にす。見る、さわる、試す、聞くなど。これらが難しいときは間接的に。

#### ⑤板書の構成

- ・板書は授業の流れが分かるものにし、見やすく楽しい表記をしていく。
- ・一時間の流れ(足跡)がわかる板書計画(視覚的効果<色・矢印・囲み・大小>)。
- ・板書はその時間の流れが分かるよう、極力消さない。(1時間で1面)

#### ⑥児童の思考・活動時間の確保

- ・45分間の中で半数以上の児童が何らかの自己表現(発表、動作化)が出来るようにする。理想は全員が一言でも言えることを目指す。

#### ⑦学びあう場の確保

- ・児童の話し合いが広がっていくように助言していく。
- ・発表する児童にも話し方のルールを指導する。(授業の流れが止まらない程度に。話し方のルールは学級指導でも指導しておくが、まだ出来ない児童を対象に)
- ・子ども同士の発言をつなげる。(友達の発言につなげる意識を育てる。教師の言葉は必要最小限に)
- ・発表の仕方の定着。(事実+考え=オリジナルの発言)
- ・発表者以外の子どもの観察。(動き、表情、目線)
- ・学び方を学べる授業の組み立てを心がける。
- ・子どもの発言に対して、うなずき、問いかけ、ゆさぶりをかける。

#### ⑧個への対応・支援

- ・机間指導中は、授業の理解度、姿勢・ノートの使い方、身辺整理の仕方等について気がついたことは指導していく。
- ・机間指導しながら、児童の様子について気付いたことを記録していく。
- ・逸脱行動をしている児童には、授業に関わりある話をし、注意を引き戻すようにする。
- ・ノートの使い方、丁寧な字が書けているかに着目して机間指導をする。
- ・個別の場面をとりあげ、個人をほめる。

- ・課題を与える場合は、早く終わった者への発展課題を用意しておく。

#### ⑨形成的評価と柔軟な授業構成

- ・提示した内容が児童にどの程度受け入れられたかを自己評価し、瞬時に児童の理解度を把握し必要なら次の手を打つ。
- ・子どもの表情等を確認しつつ、全員を常に視野に入れながら授業を進めていく。授業設計段階で本時の流れを2つ程度考えておき、当日の児童の様子に合わせて急遽変更ができるようにしておき、変更する。
- ・1時間を変化のある繰り返しで組み立てる。
- ・45分で授業が完了するように設計し、必要以上に延長をしない。
- ・子どもの実態をしっかり把握し、教材研究をする。
- ・子どもたちの理解に合わせて、柔軟な対応をする。
- ・子どもの表情等を確認しつつ、全員を常に視野に入れながら授業を進めていく。

#### ⑩学習環境

- ・机を真っ直ぐに並べさせる。(ごみが落ちていれば拾わせる)
- ・かばんを横にかけている場合は、かける位置を統一させる。
- ・笑顔を心がけ、児童・生徒を怒鳴らない。
- ・教師用指導机等の整理整頓。

## 4. 大学での生活科授業のあり方

大学の「教科指導・生活」の授業で上掲チェックリストを活用した。その結果をもとに、授業改善シートの位置づけと活用のあり方について考察する。

「教科教育法・生活」の授業で重視している点は三つある。一点目は、より具体的な体験の場を設定することである。二点目は、現在、実施されている学校教育をもとにタイムリーな教材を提示することである。三点目は、学生たちが教員になった時に生活科授業の推進員として活躍できるように力量形成を行うことである。

生活科の特色と授業の目的は、「生活科は、学校や地域の特性や児童の実態を踏まえた教材を開発し指導計画を立て、保護者や地域の人との協力を得て進めていく教科である。子どもたちにとって楽しさにあふれ、夢を育み意欲的に活動できる教科であり、全ての学びの基礎となる大変重要な役割を担っている教科でもある。本授業では、その実践力を高めるために、生活科の特性を理解し、指導するために必要な資質や技能を身に付けることにある。」と示し、次の6点に重点を置き展開していった。



### **(1) 学習指導要領の内容把握**

すべての学びの核となるものであり目標である。この内容を理解し、読み解くことが重要であり、その上で様々な体験をしていき実践力を育む。授業づくりの大変さ、指導案等を発表することや友達の発表を聞くことで見えてくる世界があり、楽しさに触れることも可能であるが、指導すべき内容に適しているかどうかを確認するために、常に指導要領に戻っていく。

### **(2) 内容に応じた具体的な資料や教材の提示**

本物の植物や昆虫を観察したり、教材化したDVD（藤池を中心に神戸市の生活科部教員と制作したもの）を視聴したりする。さらに、それらの教材を活用し、授業実践している授業のDVD等も視聴する。

### **(3) 具体的な活動例、身近な素材の教材化の体験**

個々の学生が、実際に身近な自然・地域素材を見出し教材化していく。「自分が住む町」や「タンポポ」等のイメージマップやウエビングを通して教材的な広がりや教材的価値を探っていく。考察にあたって押さえるべき大切な点は、生活科のねらいをいくつ達成できるか、また、子どもたちにとって身近で、探究的活動につながり、興味・関心が持続できるものであるかという2点である。

### **(4) 年間計画、単元計画の設計**

学校教育で重要なことは、各教科の年間カリキュラムの作成である。それぞれの教科の持つ意味、果たす役割、背景となるもの、学校教育全体の中での位置づけ等については年間計画を立てる上で重要である。学習指導要領を基に、合科的・他教科との関連的な指導を加味しながら教科書の単元等を参考に年間計画・単元計画を立てる経験をしていく。

年間指導計画案作成後、第1学年、第2学年より各1つ単元指導計画の立案を体験する。

### **(5) 指導案作成体験**

指導案作成は、どの教科教育法でも実施されている。各教科の指導案の書き方や授業展開については、実体験を通して学生は身に付けていく。

生活科では、単元指導計画を基に、学生自身がチャレンジしたい小単元を選び、どの場面の授業にするのか決めて、指導略案作りを行い、授業の流れや教師の願いについて発表後、感想等の意見交換を行う。このことにより、様々な展開の仕方があることを知ると共に、授業に対するイメージが広がっていく。

### **(6) 模擬授業（実践・参観）⇒授業改善シートの活用**

1回目の（5）の体験後、2回目は単元を変えて、授業改善シートの項目に配慮しながら指導略案作りを行う。全員が、授業を組み立てた訳や指導のポイント、この授業でどんな力を子どもにつけたいかを説明し模擬授業を行う。参観した学生は、作成者の意図したことが授業に反映しているかどうか授業改善シートを活用して評価し、意見交換を行う。

## 5. 教材開発とその手順

教材には、教師が意図的に作成する教材と子どものつぶやきから生み出される教材がある。子どものつぶやきや活動の中で見出された疑問や課題を教材化すると、子どもたちの関心は高まり、学習への取り組みは予想以上に効果をもたらすことがある。ここでは、子どもたちのつぶやきや活動の中からヒントを得て教材化した内容について述べる。

「春みつけ」で子どもたちは、校区のいろいろな場所に生えるタンポポを見つけ、校区の絵地図上にシールを貼っていった。石垣やアスファルト道路の割れ目からも逞しく生えるタンポポを見つけ、いろいろな場所に生えることに気づいていった。また、校外学習で田園地帯にある自然教育園に出かけた時も、同様にタンポポを見つけた。ある子どもが、「おじいちゃんがタンポポには日本生まれと外国生まれとがあるっていったよ。」「どこを見たら分かるの？これは、どっち？」という対話がきっかけとなり、教師は、タンポポについてそれぞれの特徴や生育の様子、名前の由来等について絵と文で構成した物語教材を作成することにした。まず、タンポポに関する資料等、根拠となるものを集め、事実を正確に把握し、収集した情報の中から生活科の目標や内容項目と照らし合わせていった。その中で国語科教材2年上「たんぽぽのちえ」及び「たんぽぽ」、理科や社会科、道徳等他教科のねらいとの共通性や合科的指導として組み込むことができるか等を判断し、教材的価値を見極めていった。この作業で大切な点は、小学校学習指導要領との整合性であり、教師が各教科の目標や内容を十分把握できていることである。

地域の自然や社会的素材を教材化するとき、可能な限りの活動を想定し、それらが教材として耐え得るかどうかを見ていくことである。教材的価値が多く見出されれば見出されるほど、その素材は教材として成長していく。一つの活動に目標を設定するとき、様々な角度から素材をとらえていくことが大切である。

### (1) 自然素材の教材化を通して

自然素材の教材化授業で、学生が教材としてタンポポを素材に物語を創作し、それをどのような授業でどのような場面で活用したいのかを明確にした授業計画も作成し、模擬授業も実施した。以下には、その具体例を二例示す。

#### ◇ 学生Aの作品「泣き虫な羊さん」

羊さんが おうちに 住んでいました。笑顔が かわいい羊さんでした。でも、とても泣き虫な羊さんでした。「どうしよう。探し物が見つからないわ。」ずっとずっと探しても、見つかりません。羊さんは、悲しくなっていました。メエメエ泣いて、おうちは涙の海になってしまいました。ヒヨドリさんが、会いに来ました。「羊さん、羊さん、元気を出して」とヒヨドリさんが言いました。ヒヨドリさんは、窓辺に一輪タンポポのお花をさ



しました。

羊さんは、今日もメエメエ泣いています。今日も、お部屋は涙の海です。ウサギさんが会いに来ました。「羊さん、羊さん元気を出して」。ドアを開けると、ウサギさんは、涙に流されてしまいました。羊さんはやっぱりメエメエ泣いています。やっぱりお部屋は涙の海です。毎日、お友達が会いに来ます。泣きやんでくれない羊さんに、お友達も悲しくなっていました。「早く、羊さんのかわいい笑顔が見たいね」と、みんなは言いました。今日も、メエメエ泣いている羊さん、ふと見ると、キラキラしたものがお部屋にたくさんありました。「これは、なあに？」と羊さんは言いました。お友達がくれた優しい気持ちが、キラキラ光り出したものでした。羊さんの気持ちも明るくなってきました。毎日、元気をもらっていたことに羊さんは、気づきました。急いで、お友達に「ありがとう」を伝えに行きました。

#### ○授業計画

- ・授業をする時期：4月、5月
- ・対象学年：2年生
- ・授業する教科：生活科、国語（道徳につながるように）

○どんな場面で伝えていくか ⇒ クラスの中に発達的に課題がある子どもがいたり、落ち着きのない子どもがいたりした時、「嬉しいときにはありがとう」を言えるようにする。（←「ユニバーサルな授業」を目指す）

○タンポポは、身近な花なのに「幸福を知らせる花」という意味をもっているのです、そこを利用する。出来るなら「小さな幸せを大切にしよう」までもっていけたら理想。

#### ○授業の展開

- ①授業の流れ（全体、順序等）を伝える。←見通しがつく
- ②タンポポってどんなもの？という発問をする。
- ③自作絵本「泣き虫な羊さん」を読み聞かせる。
- ④子どもがワークシート（→アニメーション：読書への誘い。集団で一冊の本を楽しむという協同読書）に取り組む。

○読んだ絵本で「この動物はいたかどうか」の○×クイズ

- ・元気をもらっていたことに気付いた羊さんは、その時どんな気持ちだったかな？
- ・タンポポの花ことばを考えよう

⑤ワークシートの発問の確認、発表。

⑥羊さんにお手紙を書く。

◇ 学生Bの作品「タンポポの綿毛のワーくんのぼうけん」

「不安がいっぱいだろうけど新しい所は楽しいことがいっぱいだよ。それにお友達もいっぱいできるよ。」タンポポの綿毛のワーくんは、お母さんに言われたことを思い出していました。

ワーくんは、昨日お母さんの所から独り立ちしたばかりです。初めは強気のワーくんも時間がたつにつれて寂しくなってきました。そして、空が暗くなってきて不安がいっぱいになりました。「ちっとも楽しくないじゃないか。怖いよ。帰りたいよ。おかあーさーん。」するとカラスがやってきて「邪魔だ!」と言って、羽をバサバサ羽ばたかせたのでワーくんは遠くに飛ばされてしまいました。

もう空は真っ暗です。「ウエーンウエーン、寝るところも見つからないしどうしよう。」とシクシク泣いていると、スズメがやってきて、「こんなに遅くにどうしたの?泊っていきなよ。」と言ってスズメの巣に泊めてくれました。そこには他の所からやってきた綿毛が何本もいました。みんなそれぞれに、ハプニングがあり不安がありました。それをみんなまで相談し合って励ましあって笑いあいました。ワーくんは一人じゃないんだ、みんなも同じ気持ちなんだと安心し、また、勇気がわいてきました。

次の日の朝、もうみんなとお別れの時間です。だけどワーくんはメソメソしていません。親切な人がいると分かったし友達がたくさんできたからです。スズメにお礼を言いながら、スズメの起こした風でみんなバラバラに飛んでいきます。ワーくんは「これからどんなことが起こるのかな。どんな友達ができるのかな。」とワクワクしながら飛んで行きました。

○対象 入学したばかりの小学校1学年

○使用する場面 入学して不安な気持ちを抱いている1年生が物語の主人公に照らし合わせて、不安を解消し、友達が出来やすくなるようにこの物語を紹介し授業につなげる。

○指導内容

- ①本（物語「タンポポの綿毛のワーくんのぼうけん」）の読み聞かせをする。
- ②お話を聞いて、見つけたこと、気づいたことを各自書かせて発表させる。
- ③友達の話聞いて共感し合う。入学して不安に思っている自分たちと同じだということに気付かせ、周りにいる友達の存在の大切さを知る。
- ④みんなで歌を歌う。（あったかい気持ちになる歌）

**(2) 地域素材の教材化を通して**

上記の授業以外に、第2学年「町探検」の単元計画を立てるために学生自身の住んでいる町について調べ、教材化に結びつく素材をウェブ等も活用しながら検討していった。その中

で、指導要領の目標を達成できる素材を教材化し、授業案を作成し模擬授業を実施した。指導案作成時や授業後の反省・感想等を述べる時の資料として授業改善シート表を活用した。授業改善シートは、平成24年度は指導案作成時に配慮すべき項目として提示し参考資料として活用した。平成25年度は、指導案作成時と模擬授業参観時に活用した。平成26年度の実施に当たっては、前年度の調査結果・考察から見えた問題点を意識した。具体的には、学生にチェック項目についてさらに詳細に説明し、指導案作成や授業参観で活用し、学生の授業力の変容を考察していった<sup>5)</sup>。(分量の都合上、学生の活動の具体例は省く。)

## 6. 授業改善のためのチェックリスト活用による学生の変容

ここでは、模擬授業参観の平成25年度と平成26年度の結果を比較し、必要に応じて考察を加える。(平成25年度 110名、平成26年度120名の調査結果)

### (1) 授業改善のための教師のチェックリスト集計

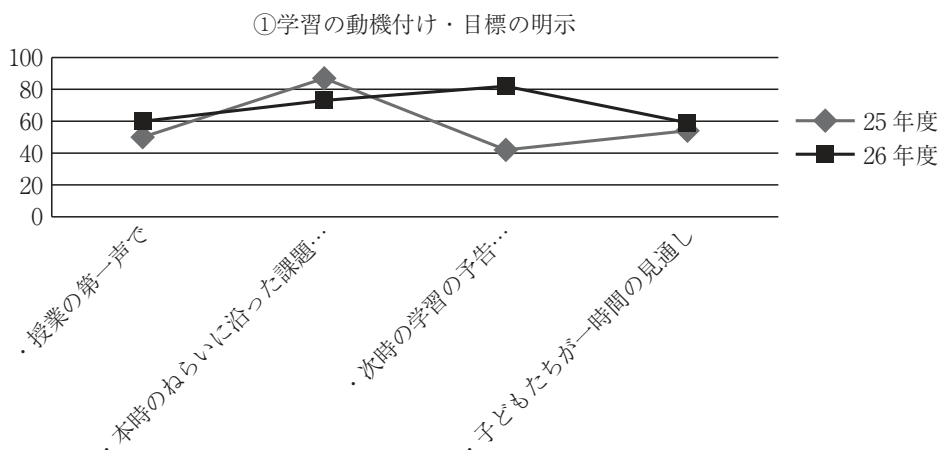
#### ①「学習の動機付け・目標の明示」の結果と考察

- ・授業の第一声で児童の興味・関心がもてる発問や教材を提示する。(50%) (86%)
- ・本時のねらいに沿った課題を1～2個出し、興味の持続を図る。(87%) (73%)
- ・次時の学習の予告を児童の関心興味もてる内容で伝える。(42%) (82%)
- ・子どもたちが一時間の見通しがもてる授業展開 (54%) (59%)

「次時の学習の予告を児童の関心興味もてる内容で伝える。」については、学生が授業に慣れてくると意識できる項目ととらえることができる。特に「子どもたちが一時間の見通しがもてる授業展開」については、教師として今後も授業力向上に向けて努力が必要な項目として位置づけるべきであると考え。

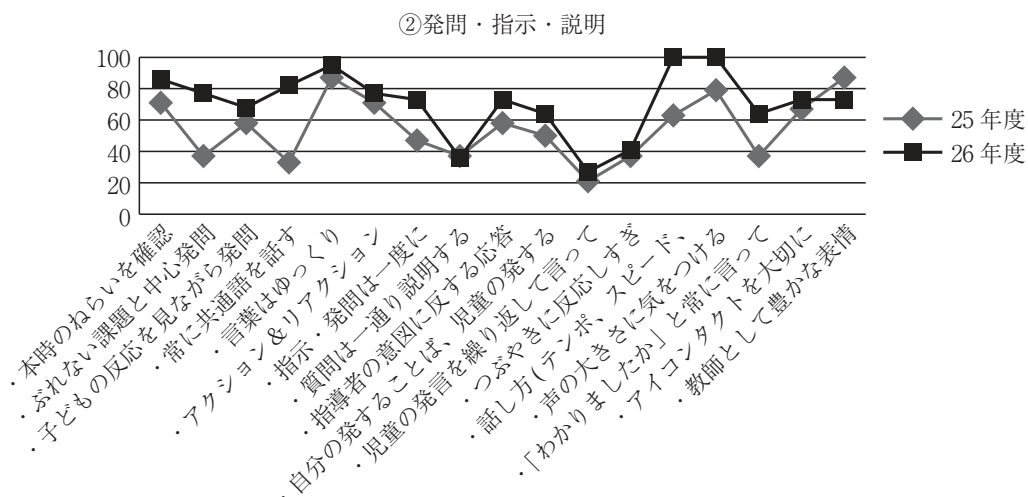
#### ②「発問・指示・説明」の結果と考察

- ・本時のねらいを確認しながら、発問をする。(71%) (86%)
- ・ぶれない課題と中心発問(言葉を含む)の十分な吟味。(37%) (77%)



- ・子どもの反応を見ながら発問の程度を工夫する。(58%) (68%)
- ・常に共通語(標準語)で話す。(33%) (82%)
- ・言葉はゆっくりはっきりと話す。(87%) (95%)
- ・アクション&リアクション(表情、声、動作、姿勢など)(71%) (77%)
- ・指示・発問は短く具体的に与える。(42%) (86%)
- ・指示・発問は一度にひとつ。(47%) (73%)
- ・質問は一通り説明するまで受けない。(37%) (36%)
- ・指導者の意図に反する応答にも丁寧に対応する。(58%) (73%)
- ・自分の発することば、児童の発することばに敏感である。(50%) (64%)
- ・児童の発言を繰り返して言っていないかチェックする。(21%) (27%)
- ・つぶやきに反応しすぎていないか。(37%) (41%)
- ・話し方(テンポ、スピード、イントネーション)(63%) (100%)
- ・声の大きさに気をつける。(79%) (100%)
- ・「わかりましたか」と常に言っていないか。この言葉は禁句。(37%) (64%)
- ・アイコンタクトを大切にする。(67%) (73%)
- ・教師として豊かな表情(笑顔、怒り、笑い等)、動き(ジェスチャー、芝居)ができているか。(87%) (73%)

「質問は一通り説明するまで受けない。」「児童の発言を繰り返して言っていないかチェックする。」と「つぶやきに反応しすぎていないか。」については、繰り返し授業実践していく上で培っていききたい技量と考える。



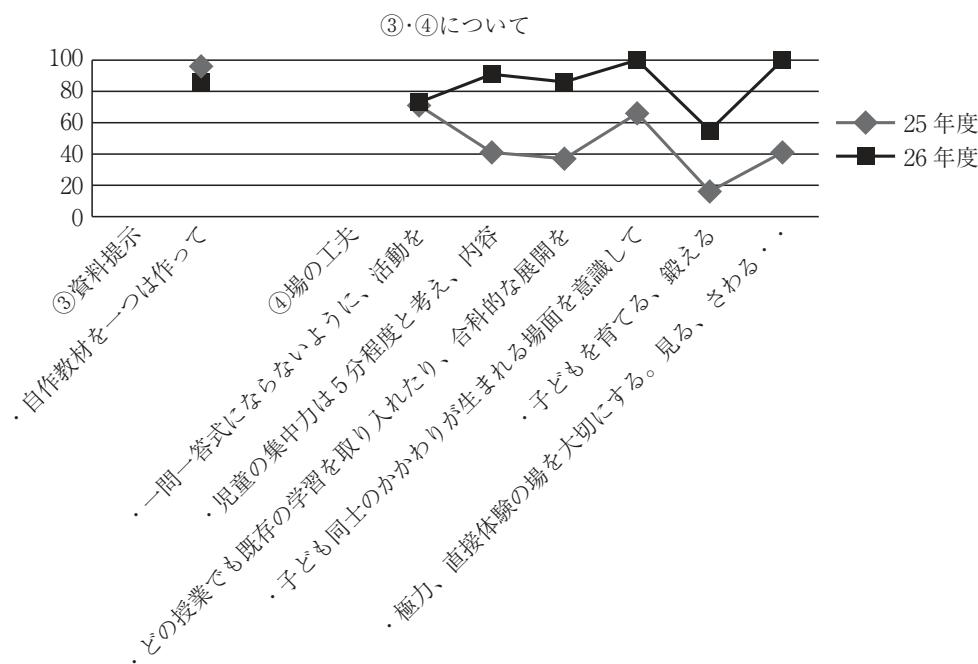
### ③「資料提示」の結果

- ・自作教材を一つは作っておく。(96%) (86%)

グラフから、子どもが興味関心を持つには具体的な手立てを講じるのが大切であることを理解していると考え。

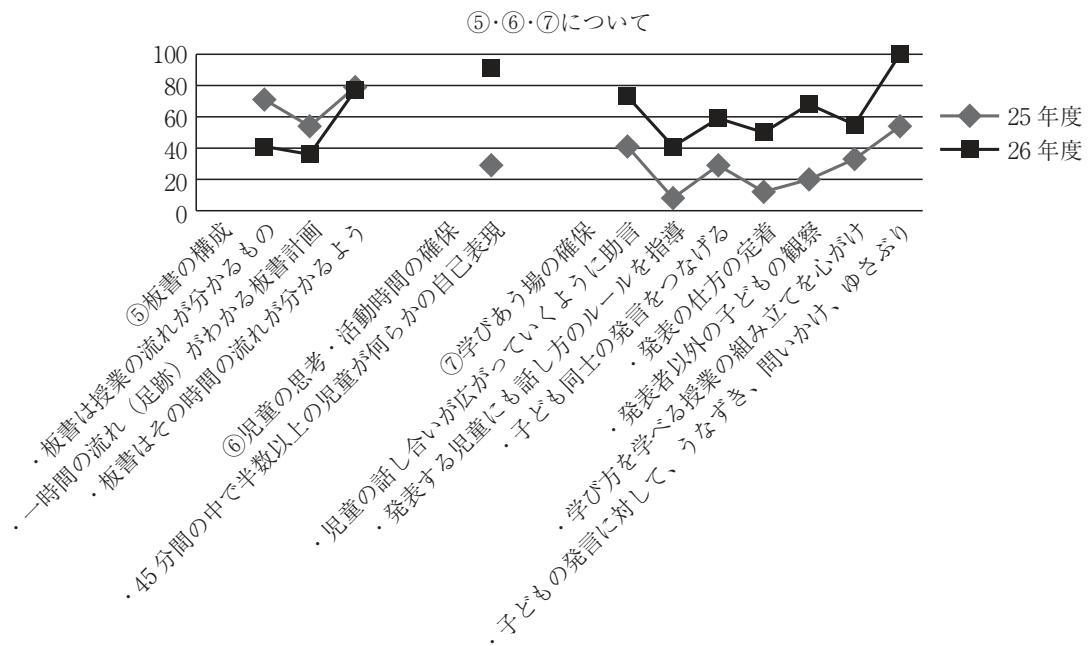
#### ④「場の工夫」の結果と考察

- ・一問一答式にならないように、活動を入れる。(話し合い活動、考えをノートにまとめる、動作化する) (71%) (73%)
- ・児童の集中力は5分程度と考え、内容を展開していく。(41%) (91%)
- ・どの授業でも既存の学習を取り入れたり、合科的な展開を工夫したりして、児童が理解を深められるよう配慮する。(37%) (86%)
- ・子ども同士のかかわりが生まれる場面を意識して作る。(相談、作業、体験) (66%) (100%)
- ・子どもを育てる、鍛える。(授業を支える学習スキルの継続的指導と定着) (16%) (55%)
- ・極力、直接体験の場を大切にする。見る、さわる、試す、聞くなど。これらが難しいときは間接的に。(41%) (100%)



上掲の結果から、場の工夫の在り方を具体的に提示することによって、授業場面でそれらを意識しようとする姿勢がうかがえる。





#### ⑤「板書の構成」の結果とその考察

- ・板書は授業の流れが分かるものにし、見やすく楽しい表記をしていく。(71%) (41%)
- ・一時間の流れ（足跡）が分かる板書計画（視覚的効果<色・矢印・囲み・大小>）(54%) (36%)
- ・板書はその時間の流れが分かるよう、極力消さない。（1時間で1面）(79%) (77%)

板書については、毎時間の計画や配慮が必要である。特に、「板書は授業の流れが分かるものにし、見やすく楽しい表記をしていく。」や一時間の流れ（足跡）が分かる板書計画（視覚的効果<色・矢印・囲み・大小>）については繰り返しの指導と実習経験を重ねていけるような講義の取り組みをしていく必要がある。

#### ⑥「児童の思考・活動時間の確保」の結果

- ・45分間の中で半数以上の児童が何らかの自己表現（発表、動作化）が出来るようにする。理想は全員が一言でも言えることを目指す。(29%) (91%)

#### ⑦「学びあう場の確保」の結果

- ・児童の話し合いが広がっていくように助言していく。(41%) (73%)
- ・発表する児童にも話し方のルールを指導する。（授業の流れが止まらない程度に。話し方のルールは学級指導でも指導しておくが、まだ出来ない児童を対象に）(8%) (41%)
- ・子ども同士の発言をつなげる。（友達の発言につなげる意識を育てる。教師の言葉は必要最小限に）(29%) (59%)
- ・発表の仕方の定着（事実+考え=オリジナルの発言）(12%) (50%)

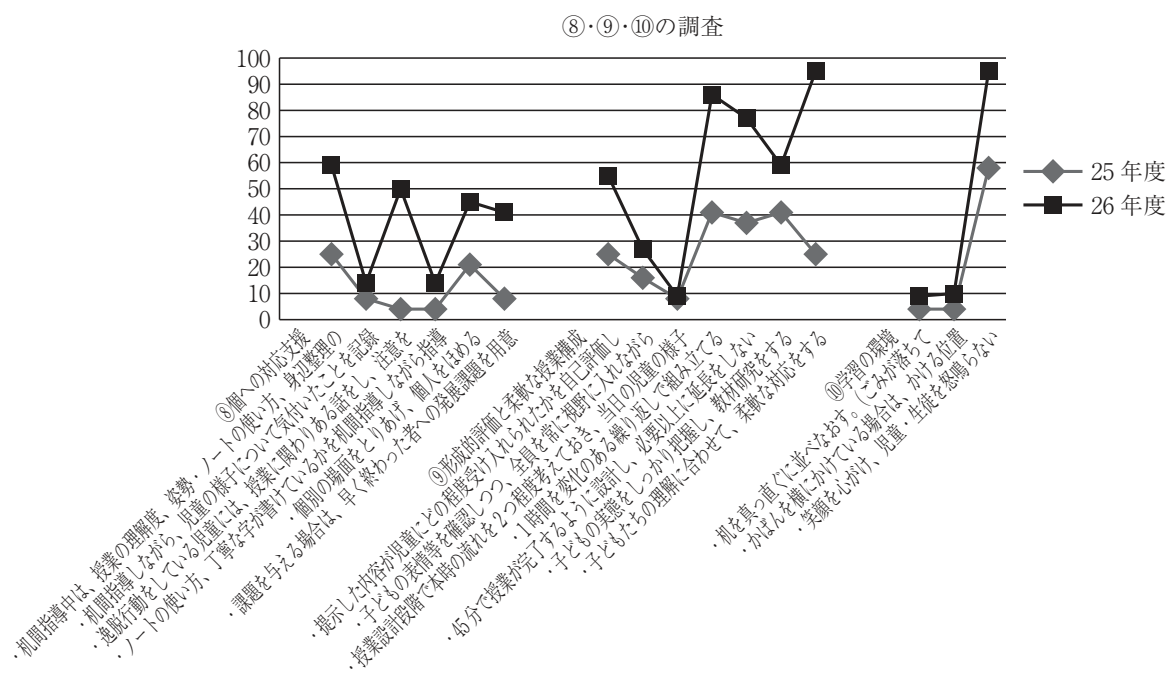
- ・発表者以外の子どもの観察（動き、表情、目線）（20％）（68％）
- ・学び方を学べる授業の組み立てを心がける。（33％）（55％）
- ・子どもの発言に対して、うなずき、問いかけ、ゆさぶりをかける。（54％）（100％）

⑥・⑦の各事項についての調査結果のグラフから、25年度に比べ26年度の学生が良くなったことが分かる。これは、授業を展開していく上でそれらの事項を常に意識していることの表れと考える。

### ⑧「個への対応支援」の結果とその考察

- ・机間指導中は、授業の理解度、姿勢・ノートの使い方、身辺整理の仕方等について気がついたことは指導していく。（25％）（59％）
- ・机間指導しながら、児童の様子について気付いたことを記録していく。（8％）（14％）
- ・逸脱行動をしている児童には、授業に関わりある話をし、注意を引き戻すようにする。（4％）（50％）
- ・ノートの使い方、丁寧な字が書けているかを机間指導しながら指導していく。（4％）（14％）
- ・個別の場面をとりあげ、個人をほめる。（21％）（45％）
- ・課題を与える場合は、早く終わった者への発展課題を用意しておく。（8％）（41％）

「机間指導しながら、児童の様子について気付いたことを記録していく。」と「ノートの使い方、丁寧な字が書けているかを机間指導しながら指導していく。」については指導中に行うことができていない。学生にとっては子どもの目立つ行動や出来事には注意を向けるが、一人ひとりの子どもへの細かな配慮や関わりを授業中に行うことは経験値からみて困難であることがうかがえる。



### ⑨「形成的評価と柔軟な授業構成」の結果とその考察

- ・提示した内容が児童にどの程度受け入れられたかを自己評価し、瞬時に児童の理解度を把握し必要なら次の手を打つ。(25%) (55%)
- ・子どもの表情等を確認しつつ、全員を常に視野に入れながら授業を進めていく。(16%) (27%)
- ・授業設計段階で本時の流れを2つ程度考えておき、当日の児童の様子に合わせて急きょ変更ができるようにしておき、変更する。(8%) (9%)
- ・1時間を変化のある繰り返して組み立てる。(41%) (86%)
- ・45分で授業が完了するように設計し、必要以上に延長をしない。(37%) (77%)
- ・子どもの実態をしっかりと把握し、教材研究をする。(41%) (59%)
- ・子どもたちの理解に合わせて、柔軟な対応をする。(25%) (95%)

「授業設計段階で本時の流れを2つ程度考えておき、当日の児童の様子に合わせて急きょ変更できるようにしておき変更する。」については、授業を実施するだけで精一杯の学生にとってはまだゆとりが持てないが、この視点は柔軟な授業展開を実施していく上でも必要であることから指導を重ねていきたい。中にはこの項目を意識し、2パターン作成する学生も数人いて、発問に対する反応を見て授業の中で変更し展開していく学生もいた。

### ⑩「学習の環境」の結果とその考察

- ・机を真っ直ぐに並べさせる。(ごみが落ちていれば拾わせる)(4%) (9%)
- ・かばんを横にかけている場合は、かける位置を統一させる。(4%) (0%)
- ・笑顔を心がけ、児童・生徒を怒鳴らない。(58%) (95%)

「机を真っ直ぐに並べさせる。(ごみが落ちていれば拾わせる)」と「かばんを横にかけている場合は、かける位置を統一させる。」については教育実習のように児童を前にしていないことから、気をつけていてもここでは評価の対象になりにくいと判断できる。

### (2) 授業改善シート・改訂版活用の場合

授業改善シートの項目は、研究実践の中から確認できたものばかりであるが、授業力が十分でない学生を対象に実施すると、児童の実態を把握することや、指導案作成や友達の授業参観の視点が明確になる。また、指導案作成には授業構成をイメージしやすく効果的な作成ができる。一方、授業参観では、項目が多すぎるとチェックすることにエネルギーを費やされる傾向になり、生の授業を体験する醍醐味が得にくくなると共に項目を埋めなければという思いに駆られる学生も見受けられた。この傾向は、現職教員にも見受けられた。

そこで、授業参観後すぐに参観授業の振り返りとして項目チェックを行うと授業の課題発見につなげることができた。しかし、A4サイズ3枚にわたる56項目の観点チェックシートでは学生や教師には負担と抵抗感を与えてしまうので、基本的な内容21項目の観点到精選しA4サ

イズ1枚の改善シートを作成し、基礎的な授業力の向上に役立てていくためにこれを活用していった。

活用にあたり、改訂版を「初級用」とし、当初の完成シート（項目）は「上級用」として区分することにした。初級用は授業実践上これだけは押さえていかなければならない基本的な項目に重点をおき、A4用紙1枚に収まるようにした。しかも、授業の10項目は大切なので、この点はしっかり押さえていくようにした。

#### A. 改訂版 授業改善シート

上記の考えのもと、改訂したシートは以下に示す通りである。

##### (1)学習の動機づけ・目標の明示

- ①授業の第一声で児童の興味・関心がもてる発問や教材を提示する。
- ②本時のねらいに沿った課題を1～2個出し、興味の持続を図る。

##### (2)発問・指示・説明

- ①本時のねらいを確認しながら、発問する。
- ②指示・発問は短く具体的に与える。
- ③自分の発する言葉、児童・生徒の発する言葉に敏感である。
- ④つぶやきへの対応。

##### (3)資料提示

- ①自作教材を一つは作っておく。

##### (4)場の工夫

- ①一問一答式にならないように、活動を入れる。(話し合い活動、考えをノートにまとめる、動作化をする)
- ②子ども同士のかかわりが生まれる場面を意識して作る。(相談・作業・体験)
- ③極力、直接体験の場を大切に作る。見る、触る、試す、聞くなど。これらが難しいときは間接的に。

##### (5)板書の構成

- ①一時間の流れ（足跡）がわかる板書計画。(視覚的効果〈色・矢印・囲み・大小〉)

##### (6)児童の思考・活動時間の確保

- ①45分間の中で半数以上の児童が何らかの自己表現(発表・動作化)が出来るようにする。
- ②理想は全員が一言でも言えることを目指す。

##### (7)学びあう場の確保

- ①児童の話し合いが広がっていくように助言していく。
- ②発表者以外の子どもの観察。(動き・表情・目線)
- ③子どもの発言に対して、うなずき、問いかけ、ゆさぶりをかける。

(8)個への対応・支援

- ①机間指導中は、授業の理解度、姿勢・ノートの使い方、身辺整理の仕方等について気がついたことは指導していく。
- ②逸脱行動をしている児童には、授業に関わりある話をし、注意を引き戻すようにする。
- ③ノートの使い方、丁寧な字が書けているかを机間指導しながら指導していく。

(9)形成的評価と柔軟な授業構成

- ①子どもの表情等を確認しつつ、全員を常に視野に入れながら授業を進めていく。
- ②1時間を変化のある繰り返しで組み立てる。

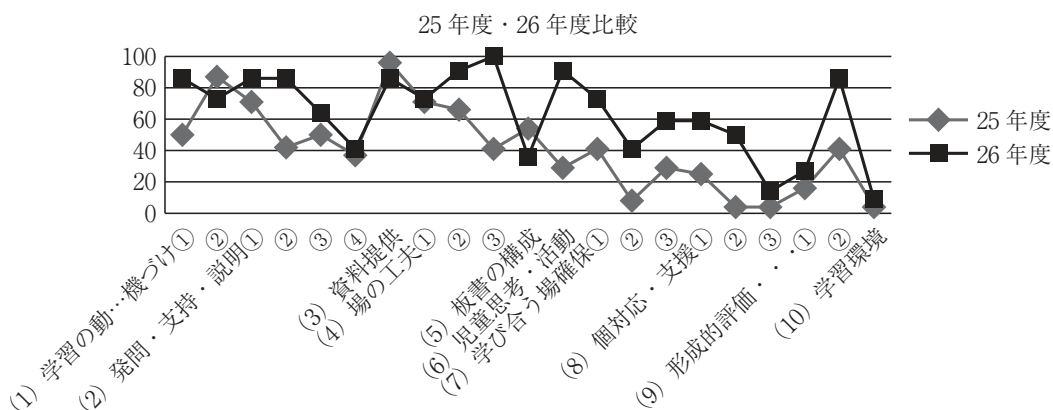
(10)学習環境

- ①机まわりの整理整頓ができています。

## B. 改訂版「初級用」チェックシートから見える学生の生活科における授業力

下記のグラフは、平成25年度から平成28年度に実施した授業実践の中で学生の授業のとらえ方・見方について調査し比較検討したものである。

### ① 改訂版「初級用」チェックシートで比較する平成25年度・26年度



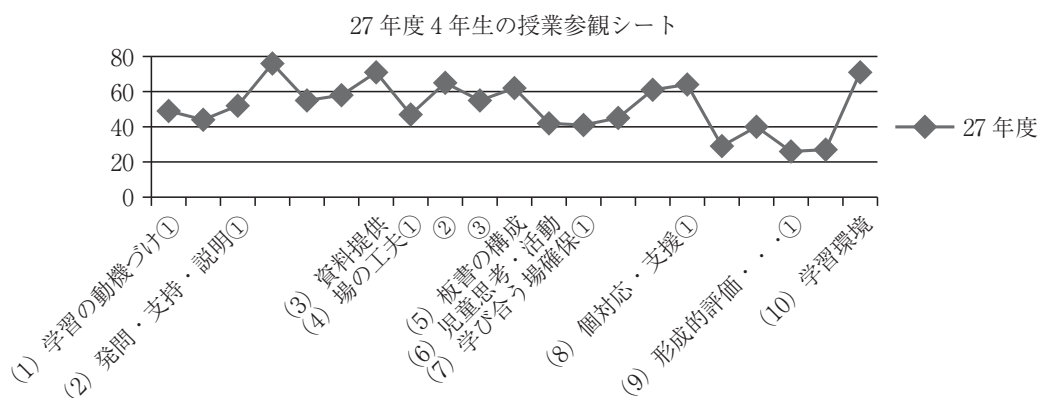
項目ごとの考察は前ページで述べたが、教員の指導により改善できる項目もあることが分かる。

### ② 平成27年度先輩教師の授業参観から

25年度に調査した学生が27年度4年生(85名)になった時、教職実践演習のフィールドワークで出かけた小学校の先輩教員の授業を参観し、授業チェックシートに記入した。

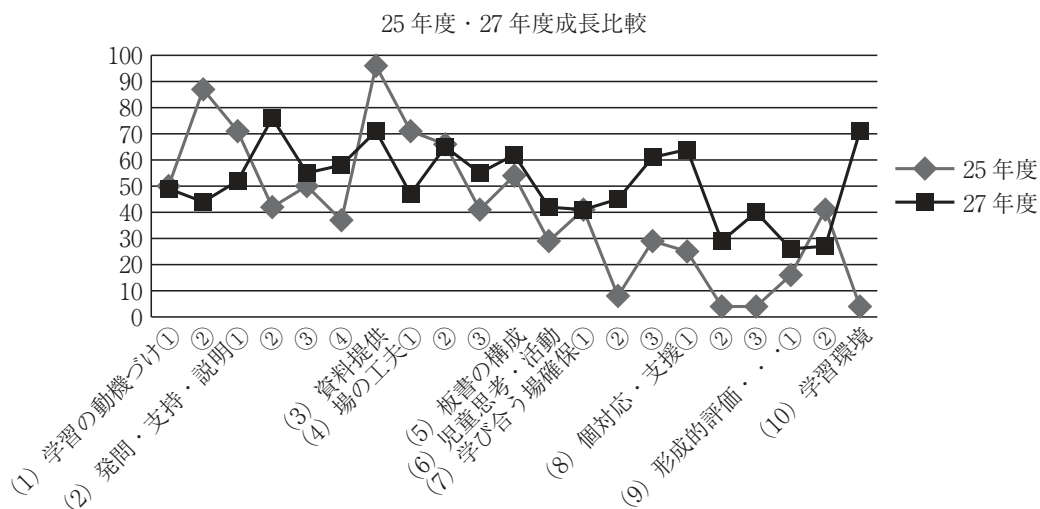
授業改善シートを活用して見えてきた課題であるが、下記の項目については、学生の力量と先輩教員の授業力の関係も見なければならぬと考える。



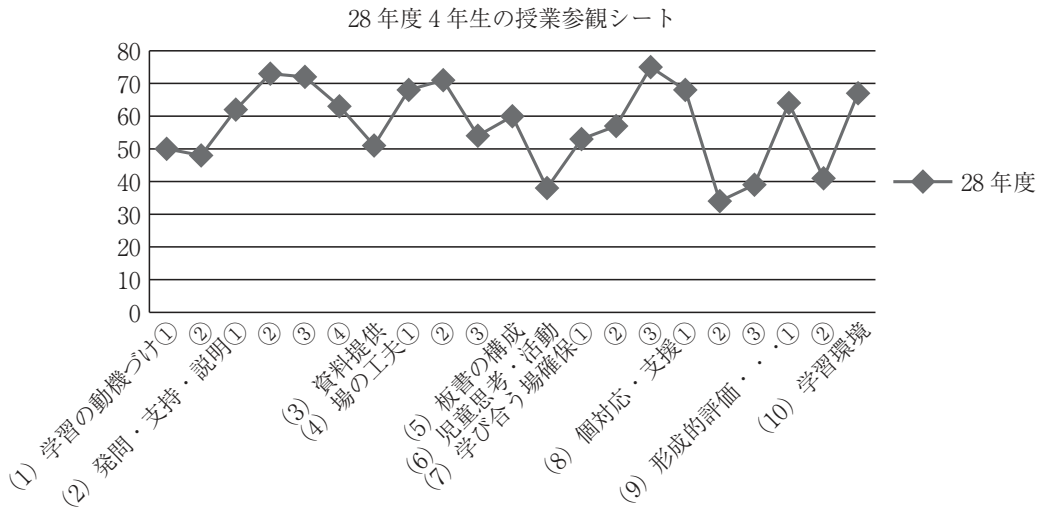


- (1) 学習の動機づけ・目標の明示①②
- (2) 発問・支持・説明①②
- (3) 資料提供
- (4) 場の工夫①
- (5) 板書の構成
- (6) 児童の思考・活動時間の確保
- (7) 学びあう場の確保
- (8) 個への対応・支援②③
- (9) 形成的評価と柔軟な授業①②
- (10) 学習環境

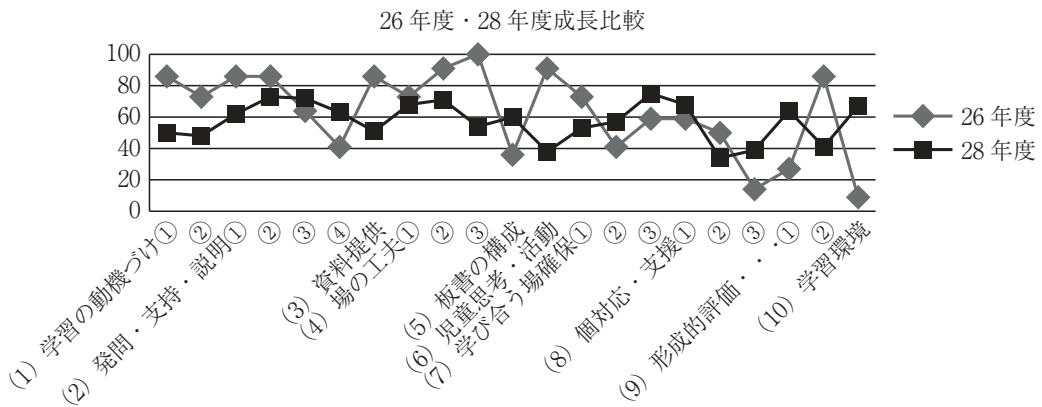
③ 平成25年度2年生と平成27年度4年生の成長比較



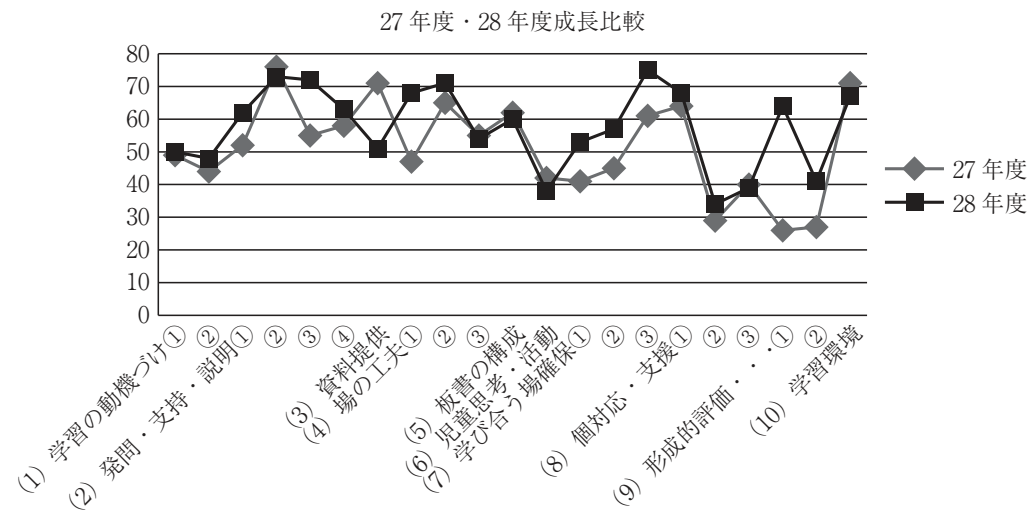
④ 平成28年度の4年生（101名）が先輩教師の授業を参観して



⑤ 平成26年度2年生と平成28年度4年生の成長比較



⑥ 平成27年度と平成28年度の4年生の成長比較



⑥のグラフから（１）学習の動機づけ（６）児童の思考・活動時間の確保（８）個への対応支援（９）形成的評価と柔軟な授業構成の４項目に課題が見られる。グラフの傾きは似ているところから、これらの課題の指導については学生の授業参観の力量なのか、参観された側の授業者の課題なのかを明らかにしていく必要があると考える。

神戸市教育委員会の初任者を受け入れている校長や初任者自身の調査にもあるように教科指導について力量形成が必要であるとの結果が示されている。この点からもさらに大学の講義の充実が求められている。

#### 教育委員会が調査した初任者の課題

神戸市教育委員会が兵庫教育大学の協力を得て管理職より調査を行った結果

##### I. 「大学時代に身に付けてほしかったこと」の上位項目

- （１）対人間関係力（２）生徒指導（３）基礎学力（４）国語力  
（５）教科指導・学級経営

次いで 人権教育、特別支援教育、公務員倫理、家庭・地域との連携

##### II. 初任者が大学時代に勉強しておきたかったこと

- （１）基礎学力（２）教科指導（３）国語力（４）生徒指導（５）学級経営  
次いで 特別支援教育、道徳教育

※出典 神戸市教育委員会資料「初任者研修等における教員の意識調査から」

兵庫教育大学 平成26年度アンケート調査より（管理職・神戸市初任者対象）

### （３）学生の学びと成果

これまでの授業展開と調査や学生の感想から以下の点が明確になった。

- ア. 生活科が学校教育上、重要な役割を果たしていることを演習等から実感する。
- イ. 授業評価・改善シートの活用で、次のようなメリットが得られる。
- ・授業中の児童の活動や思考過程を理解していく。
  - ・授業の創り方、見方、授業後の評価のあり方が分かる。
  - ・授業実践後の話し合いでは、具体的な内容で、授業改善に向けて話し合いが活発になる。
  - ・身近な素材の教材化の意義・効果を理解する。
  - ・身近な素材を様々な角度から捉え、教材として活用する方法が分かる。

## 7. 結論と今後の課題

本研究は、生活科授業のあり方と授業における教師の力量形成に有効な方途を見出すことを目指したものである。生活科が目指す授業を設計することや授業改善には何が課題なのかを常

に確認し、実践していく必要がある。開発した授業改善シートは、授業構築のチェックリストとして活用したり、他の教師の授業を観る視点を明確にして観察したりすることにつながった。ひいては、学生の力量形成に資するものと言える。

大学では、授業を通して、生活科の理論的な位置づけや日々の授業を設計していく上で大切にすべきこと等について指導してきた。結果として、多くの学生の個性豊かな作品と授業展開ができていったと考える。これらの取り組みは、学生にとって、今後、学びをより深め、授業を構築する楽しさを実感し、子どもと共に創る授業の大切さに気づき、実践していくうえでの基礎力になると考える。

今後は、授業改善シートに過不足がないかをさらに検討することが必要である。また、27年度、28年度の4年生のグラフ（グラフ⑥を参照）からも分かるように、(1) 授業の動機づけ・目標の明示 (6) 児童の思考・活動時間の確保 (8) 個への対応・支援の項目に関しては、期待値に至っていない。この点については、その原因を解明することによって、さらに授業改善につなげたいと考える。

## 注

- 1) 教員に求められる資質能力に関する関連答申＜抜粋＞ 1. 今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）平成18年7月11日 中央教育審議会
- 2) 研究内容等の詳細については下記の文献を参照。
  - ・「授業場面における学級集団形成の研究—学級経営と授業設計の力量を高めることを通して—」 共著 平成5年3月 神戸市総合教育センター編 研究報告278号 藤池安代、田中博之他8名 p111～p136
  - ・「授業場面における学級集団形成の研究—一個が生きる学級経営と授業設計のあり方—」 共著 平成6年3月 神戸市総合教育センター編 研究報告784号 藤池安代、浅田匡、田中博之、佐古秀一他6名 p67～p96
  - ・「授業場面における学級集団形成の研究—一個が生きる学級経営と授業設計のあり方（2）—」 共著 平成7年3月 神戸市総合教育センター編 研究報告784号 藤池安代、浅田匡、田中博之、佐古秀一他8名 p1～p37
- 3) 2)と同様
- 4) チェック項目作成後、神戸市教育委員会指導主事 但馬桂子先生（現神戸市立和田岬小学校長）の助言を得た。
- 5) 研究内容等の詳細については下記の文献を参照。
  - ・生活&総合navi 2013vol.66 単著「大学から始まる生活科の学びと力量形成のあり方」日本文教出版 p1～p11
  - ・下記の3回の日本生活科・総合的学習教育学会発表をもとに論文にまとめたもの。
    - ①平成26年度第23回全国大会 埼玉大会「生活科の学びと力量形成のあり方」p214 平成26年6月14日
    - ②平成28年度第25回全国大会 宮城大会「生活科の学びと力量形成のあり方～授業改善シートを活用して～」p224 平成28年6月11日
    - ③2016生活・総合学習ネットひょうご冬季研修会（於 神戸市立水産体験学習館）日本生活科・総合的学習教育学会兵庫支部「生活科の学びと力量形成のあり方～授業改善シートを活用して～」p1～p8 平成28年12月26日